例会講演要旨

『槇日記』について

芹沢武男

槇日記は、明治元年生の済生学舎卒の医師槇豊作の日記で、明治二十六年から昭和三年までの十五冊にわたる厖大な日記である。此の日記は、医師・文人であった槇豊作の社会全般、特に医業、短歌、俳句、漢詩、政治、経済、物価等に関するもので、沼津市医師会史、近代文学とその風土、現代短歌大系、アララギ二十五年史に資料として引用されている。

その中で、当時の激しい対診の三例を取りあげて見たい。相手は、当時の沼津の大病院、駿東病院の院長大学東校明治九年卒の室賀録郎、同副院長大学東校別科卒の須田茂馬、父の実家の従兄(弟?)中野峰得である。

明治二十七年六月二十二日

朝我入道ヘ往診。中野氏ト対診。

午前宮町辺ヲ廻診。午後市中回診。秋山氏ト浅間町ニテ対診。予ガ診治中ノ患者ニテ某院長ト意見相違ス。院長ハ腸チフス?ト。予ハ急性心臓内膜炎ト。何レニ正鵠ヲ得ルヤ否、経過ヲ見バ一層明カナラン。

六月二十六日

秋山氏ヲ訪フ。帰途某院長ヲ大門ニ見ル。見ヌ状ヲ為シテ過タルニ因リ予モ車夫ニ挨拶ハ為サザリキ。

西浦村古宇、医師広瀬氏ヨリ彼曰衝突ヲ来タセル患者争ニ関シテ書状来タル。其ノ書ニ曰ク『偖足保直野由右衛門ヨリ来診ヲ被乞往診仕候処沼津ニ於テ発病先生之御治療ヲ仰候由不取敢患診仕候処脈搏六十七温度ハ常温ナルモ脈上ノ異常ト云左心之悸動之拡張ニ依テ愚考スレバ心臓内膜炎之恢復期云々ト』以テ過日予ガ診断ノ正シキヲ知ルニ足ラン

明治二十七年七月四日

午後市中回診方箋五十有余

初夜中野氏ト対診。熱勢脚気トノ予ノ診定。氏聴診一番後、予注意シテ頸動脈音アリ、乞フ聴ケト。更ニ又曰ク股動脈音アリ著明ナリト。此音ヲ聞キシ時脇窩果シテ如何、冷汗ナカリシヤ否。槇ノ意張ハ常ニ此ノ如キ時ニアル也。

明治二十七年六月二十三日

夕方須田茂馬氏来リ曰ク君ヨリ届出タル伝染病患者ハ肺炎ニテ今朝分利セルニ因リ君ヨリ都合ヨキ様取扱ヲ願ヒタシト。予ハ甚不思議ニ堪ヘザレドモ日頃信用シ居ル同氏シカモ副院長トモ謂ハルル同氏ノ言故然ラバ直ニ其積ニ為スベシト答フ。

豈計ランヤ暫ラクアリテ其患者ノ町内衛生組長ニ名来リ曰ク、実ニ奇々怪々故ニ君ニ実情ヲ告ケント曰ク

須田氏君ノ診断書ノ出テシヲ知リシヤ否同ジク腸窒扶斯ノ診断書ヲ出タス。然ルニ君ノ診断書前キニ既ニアルアリ更ニ同一患者ニ対シテ其要ナシトテ却下ス。是レ役場宿直簿ニ明記セル所警察所又之ヲ知ル。然ルニ却下セラルル後ハ説ヲ変シテ曰ク彼ハ肺炎ナリト。故ニ槇氏ニ誤診届ヲ出タサシメテ避病院ヨリ帰下セシム

可シト。事実此ノ如クナリト云フヲ聞キ予ハ其意外ニ驚キシモ別ニ予ハ予ノ意見アルヲ以テ然ラバ予ハ決シテ誤診届ヲ出タス必要ヲ見ズ若シ何等カノ届書ナリ出ストナラバ更ニ診察ノ上ナラデハセズト両衛生組長ニ答ヘテ両氏ハ帰リタリ

明治二十七年六月二十四日

今朝須田氏ヨリ、車夫石貝豊吉ヲ以テ彼ノ患者ノ全治届ヲ請求ス。因テ昨夜同氏ノ言ノ信実ナラザルヲ談シ断然拒絶ス。而シテ更ニ書ヲ寄セテ曰ク、予ヨリ役場員ト相談シ伝染病転帰届トシテ出シ事済タリト。自ラ為セシコトハ自ラ始末スル、是レ当然ノコト。